



新潟の典型的な風景、住民総出の祭りや行事、平凡な日々の営みなど、ローカルの「あたりまえ」は、異文化で育った人たちにとって、どのように映るのだろう。

県内でも本物の「古き日本」の風情を残す、三つの地区を、はたしてグローバルな目は、何を発見するのか。

異国の新潟で長く暮らす女性たちと歩いてみた。

みんなのお堂が放された日

—イザベラが訪ねた新潟市西蒲区善光寺—



匠のみならぬ腕を見せつけるお堂の装飾彫刻。竣工当時の人は、さぞ驚いたろう。鐘楼門のある寺は新潟市では珍しい。明治期に村の有志の篤志により建造。当時の梵鐘は戦時中に供出され、現在2代目。梵鐘の写真はイザベラさん撮影。



ゆるやかな時間がながれる堂内。秘仏の手と参詣者の手をつなぐ(ぜんの綱)という真っ白な綱が目を惹く。縁起の奉読、灯明、お供えなど先祖から伝わる盛儀のしきたりがお役についた人によって庸々と進んでいく。

嫌われた土地

精緻な唐様の彫刻に囲まれた壯麗な外觀にもかかわらず、お堂のなはシブルで力強い。太い柱や縦目のない式台など良質な木材ならではの美しい木肌が目につき、困窮のなかでお堂の建設を敢行した農民たちの意地を見る。

雨模様のひんやりした空気が流れるお堂には、それぞれの役目を担当する住民たちが、その時のなかに身を置いている。よそ者の参詣をこそさら歓迎するでもなく、奇異な目で見るでもなく、その距離感が心地よく、すんなりと場の空気に馴染む。開帳の行事は格式というよりも、アーベーがなく、進行表どおりに進める厳格な縛りもなく淡淡と過ぎる。式台で袴姿に正装した人が縁起を語る、その脇の建物ではジャズライブがあり軽快なリズムが静かなお堂に進入していく。縁起を奉じた人も、その後すぐにステージに立つという。伝統と現代、聖と俗のこちやまぜ感が何とも大らか。「みんなのお堂だから、自分たちの思いどおりのことが自由にできます」と地元の人が教えてくれる。

東西の地獄絵

本堂を後にし、前立本尊が安置され

夕闇とともに参拝者でざわつく

は、東西の地獄絵

は、東西の地獄絵

は、東西の地獄絵



地元でおなじみのかさばんの登場で、子どもたちはおはしゃぎ。

想い 農民の心のタイムカプセル 四十年越しの宿題

新潟市の南西部、かつて長岡藩の代官所があつた曾根地区の隣に、善光寺という集落がある。江戸初期の新田開発が行われた頃、曾根村の分村として一六四〇年頃にその名が記録に登場する。村の外れに信州善光寺の本尊と同型の仏さまを安置している、越後善光寺という西蒲原では有名な寺がある。

地元に伝わる寺の縁起によれば、この地を治めていた武将の娘が崇敬していた本尊が行方知れずになり、数奇な運命で善光寺に戻ってきたことから村の鎮守仏を祀るお堂をたてるよう、藩から達しがくる。長岡藩主四代忠寿から下された香典や、長岡の榮涼寺で開帳した時の賽銭などを建造資金の一部に充てる計画だった。しかし新田開発の出費がかさんだうえに、水難や凶作がつづき、建造金はその救済資金に充てられ、計画は長い間放置されたままになつた。それでも長期間の放置を心苦ししく思った村びとは、困窮のなか、協力しあい一七七一年(明和八)に現在のお堂をたてたのである。計画から

竣功まで、実に四十年以上の時が流れている。

村の懐に入る

八月十六日、年に一度の本尊の開帳があるというので、ガラオン・イザベラさんと一緒に訪ねてみた。イギリス出身のイザベラさんは二十七年前に来日。東京で働いた後、縁あって新潟に移り住んで二十年近くが経つ。境内には世界に誇れる宝物がたくさんある」という新潟ファン。ただ伝統的な宗教行事に疎いわたしたち。善光寺にゆかりがあり、幼い頃から開帳時の盛大な賑わいを身近にしてきた女性と、地元で暮らすその妹さんに導かれ、はじめての村の、はじめてのお堂にあがる。



善光寺の寺紋が象られた干菓子。参詣した人に配られる。

それでもなぜ新潟県の小さな村が善光寺と名乗り、信州善光寺と同型の仏さまがもたらされたのか。それを確かめるだけの文献は探し難くなかった。ただ昔から近郷で言っていた「善光寺の人になるか、鉢に頭をすられるか。鉢に頭をすられても善光寺の人になる。耕地整理以前の善光寺は、集落から遠く離れた田んぼが多く、また鎧潟などの大きな潟に近いため低湿地の土地が多く、苦労がともなう所へは誰も移住したがらなかったのだ。そんななかで苦労を覚悟の上で善光寺に移住してきた人に、つねに寄り添い力づける仏さまが必要だったことは間違いない。

越後善光寺は、この地を選び、この地で苦労してきた農民の心を記憶するタイムカプセルだった。



地元でおなじみのかさばんの登場で、子どもたちはおはしゃぎ。



荒海をこえた商人たち

町のすぐ裏の浜から、粟島の大きな島影が見え、はるか片隅に角田弥彦が島のように浮かんで見える。一方、陸側は幹線道路沿いの国有林に遮られ、その存在に気づく人は少ない。町の入口から荒川の河口まで、三百年前と変わらぬ幅の広い街道筋に、重厚な町並みが続く。家々は玄関を固く閉ざし、いつものように押し黙っている。その江戸時代の原型を留める風景のなかを歩きはじめたイザベラさんは、随所でスマホを構える。お祖父さんの仕事の関係で、古い建物の価値を知る眼は、この町並みの真価を見過ごさなかった。母国イギリスも十四世紀以前の建物は木造だったといい、懐かしさを覚えたようだ。

そして町家のなかに入つて、二人

その日も日本海からきれいな風が、歴史的景観が続く海べの町に吹いていた。農地を持たない人たちが歩いてきた道を訪ねに、前述のガラオン・イザベラさんと塩谷に行く。

村上市塩谷は、平安後期に製塩業の村として誕生。以来、時代の変化にあわせ塩づくりの過酷な労働で鍛えられた忍耐力と團結力で、千年におよぶ時の航海を続けている。

檸と漆の記憶

塩谷活性化推進協議会事務局をつとめる、野澤食品工業の野澤道雄さんは「塩谷の魅力は、町家のなかを見ないとわかりません。多くの家が化粧材として櫻をもちい、柱や建具はすべて漆が塗られています。こんな贅沢ができるのは、塩谷が漆の積出港で町には常に漆の蓄えがあつたからです。漆は朝日村で採取され、内陸水運で塩谷まで運ばれてきました。能登の輪島塗りの漆は、多くが塩谷から渡ったものが使われていたといわれています。櫻も荒川や胎内川の上流で切り出し、川を下って運ばれてきました。荒川の河口にある塩谷は、流域の村々と日本海をつなぐ要の地。そこから江戸へ通じる兵庫直

運が発達していました。会津や米沢にも自由に行き来でき、この地の利を生かした交易も盛んでした。

文化財のなかで続く伝統的な醸造業、懐かしい雑貨商、町の地形と歴史を俯瞰できる稻荷山の展望台など、海運で栄えた町の繁栄ぶりを味わった小半日。イサベラさんは「凄いです。隠れた場所に凄い宝物があつたなんて。世界のなかでも歴史・文化に関心のある人なら現地に行つてみたいと思う魅力と価値があります」。野澤さんも「塩谷の歴史的町並みは、そうあるものではありません。いろんな地域を見てきた経験から、自信をもつて言えます。これから塩谷が進む道は、観光だと思っています」と添える。塩づくりから始まり千年の時の荒海を越えたきた商人の眼には、その先の航海図



文化財に登録された町家のなかにある蔵で伝統的な製法で味噌・醤油をつくる野澤道雄さん。毎日、桶に仕込んだ「諸味」を攪拌するという。

イザベラさんが撮影した瀬賀家の2階の廊下。障子は海外の人にとって新鮮なのだろう

いまでは見ることのないガラスを嵌めた戸がある野澤家の座敷。すべてが昔のままで、すべてが重厚で退かしい県内一低い山として登録された稻荷山の展望台から町家の特徴や地理的な特徴を説明してくれた野澤さん



この階段を登りきった所にお稲荷さんが祀られている。江戸時代、その周辺に荒川河口を出入りする船を見張る村上藩の番所があったことから「番所川」とも言われる。

日本海に並走する砂丘に築かれた塩谷の町は、こうしたシンプルで堂々とした町家が多く、それぞれに風除けのための工夫がなされている。

町のすぐ裏は日本海。一年中ほぼ、北西の海風が吹く。その風のため雪雲が飛ばされ、降雪はほとんど見られないそうだ。

通りから海に抜ける小路。その両脇にやや小ぶりな町家がたつ。杉の樹皮を外壁にしている珍しい家もあった。

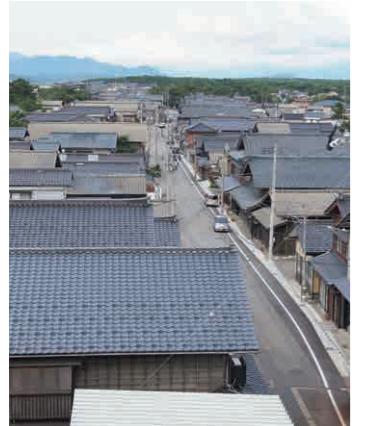
塩づくり村の千年航海

つくる
變化も努力も厭わない血脉

ともビックリ仰天。暗く長い土間の先から、息をのむ光景が現れ、北前船の回船で栄華を極めた湊町商人の財力を、思い知らされた。とにかく

の道筋にもあたり、水陸とともに地の利に恵まれていました」と説明する。代々名主だった家格を継ぐ野澤さんの話は、北前船による交易で隆盛を

移転します。そして酒・味噌・醤油などの醸造業に乗りだし、商品を北海道などに積み出すようになります。



新潟のどんよりした冬の空だけは馴れないというロミさんが、もっとも心がかった町家の中庭。今まで行った国では見た事もない工夫だという。

伝える 共通性と個性を探す

レトロな舟運の町

海運に活路を見いだした塩谷に對し、舟運で栄えた町を訪ねる。新潟市秋葉区の、信濃川右岸にある小須戸である。現在はアザレアやチューリップなどの花卉栽培で知られるが、江戸時代から昭和初期まで、信濃川を通じ新潟→三条→長岡をつなぐ舟運の中継地として栄えた在郷町。近郷の人たちに、時代の先端をいく商品や情報を入手できるハイ

センスな町として知られた時期もある交易の町だった。
町のメインストリートは信濃川に直交するようあり、道の両側には妻入りの小さな町家が雁木でつながり、本物の昭和の匂いがブンブンとする。ひと昔前なら、どの町にもあった平凡な街道風景である。ただ約一キロメートルにわたり、同時期に建てられた妻入りの町家が連続する町並みは珍しく、地域の価値に気づいた地元の人たちによって、町の景観を昔風にもどす活動が十年前から始まっている。近代的なサッシ戸を沂い色のものに交換するなど、すこしづつシックで奥行きのある町並みを取り戻しつつある。

この伝統をリノベーションしつつある小須戸を、ブラジル出身で新潟市での在住歴二十年の保坂ロミさんと訪ねる。はたしてリオのカーニバルで知られる情熱の国の人気が、沂く、控えめな町をどのように見るのである。

木を使つた町家が多く、百年以上の時を経ても、こうして多くの町家が残っています。はじめて小須戸の町を歩いた時、小路の入口や雁木の柱に貼られた火災除けのお札が印象的だった。それには町の辛い過去が隠されていたのだ。

通りの風景は、明治の大火後のもだが、街道そのものは江戸時代の、六斎市や馬市などで賑わった頃と変わらないといふ。さっそく外観からでは知りえない町家の特徴や町の個性を町歩きをしながら教えてくれた。秘密めいた裏通りにロミさんもご満悦だった。

かつて多くの食品や織物の機屋があつたといふ、信濃川に近いエリアに移動する。いろんな蔵や工場らしき建物がさまざまな経年変化を留め、静かに往時の隆盛ぶりを伝えていた。建物を覆うコールタールを塗つた。建物の前でロミさんが「え～っ!」と声をあげた。建物を沂う波形トタンを沂つた。波形トタンをしげしげと見つめる。イソでは、これと同じ波形トタンに船舶用のベンキを塗り、住宅の外壁にしています。トタンは安価ですから庶民には一般的なものです。ただ色は全然派手。オレンジや黄色や青などカラフル。そんな家が狭い土地にひしめいている景観は、わたしの原風景のひとつ。こんな遠い国の裏通りで

異国で発見する故郷

—ロミが歩いた新潟市秋葉区小須戸—



明治大火の記憶

懐かしい味がした、おかめ型のお菓子。昔から小須戸といえれば「おかめ」、おかめといえば「小須戸」なのだという。

町家のなかにある小さな庭である。間口が狭く奥行きのある町家では、採光のために庭を設けるのは普通で、日本人には見馴れた風景。でも初めて見たロミさんは、その知恵に感動したようだ。家のなかにいながら、時間によって変化する空気の流れや光を移ろいを感じられる素晴らしさを説く。

町家のなかにある小さな庭である。間口が狭く奥行きのある町家では、採光のために庭を設けるのは普通で、日本人には見馴れた風景。でも初めて見たロミさんは、その知恵に感動したようだ。家のなかにいながら、時間によって変化する空気の流れや光を移ろいを感じられる素晴らしさを説く。

ごちやごちや感がいい

歴史的な景観が続くメインストリートから横道にそれを。はじめは閑静な住宅が規則的に並んでいたが、だんだん道幅が狭まり、けもの道のような様相を帯びる。この先を本当に通り抜けられるのかと不安になりながら冒險心に火がつく。路の両脇から家が迫つたかと思うと、突然、役目を終えた空き地が現れ大きな空が広がり、その片隅に崩れ落ちた。



伝統的な町並みを重厚に引き締めていた、町で一番大きな屋敷の玄関先に立つ保坂正晴さんとロミ保坂さん。この木造建築には、小須戸ならではの町家の特徴が多いといふ。



(水と土の芸術祭)の作品が展示されている町家をはじめ、色の乏しい沂い町を歩いたロミさんが、小路で見つけた故郷。下段右の写真に写る黒い波形トタンがそれで、南米の町でも庶民のあいだに普及している外壁材だそうだ。

インフォメーション

越後善光寺如来堂

〒959-0411 新潟市西蒲区善光寺42
TEL 0256-88-6863(田辺・2018年度)

塩谷活性化推進協議会事務局

〒959-3441 村上市塩谷1227
TEL 0254-66-5507(野澤食品工業内)

小須戸町並み景観まちづくり研究会

TEL 090-6199-3921(村井)

読者の声 ~前号を読んで~

しっかり味わいたい村上茶

「北限の茶処」とは、あまりにも当たり前にCMやポスターで目にしていただけに、まったく違和感なく受けてとめていました。でも考えてみれば、お茶はインドや静岡など温暖な地方の特産物。その「当たり前」を生み育てるのに武士や町人による壮大な物語があったのですね。村上のお茶をもっとしっかり味わっていきたいと思いました。

(新潟市 50代女性)

西欧と南米の「外の目」を借りて歩いた小さな旅。あらためて県内は、世界のなかの素晴らしいローカルが点在していることを知る。そして感情の動かし方は、東西でひとつも変わることを実感できた貴重な旅だった。